

共同研究 ● パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点 (2011-2014)



エルサレム旧市街、ユダヤの聖地「嘆きの壁」。ここに入るには、ものものしいセキュリティ・チェックを通過しなければならない。イスラームの聖地「ラム・アッ・シャリーフ」と隣接している。

とあるテレビドラマの衝撃

昨年(2010年)9月、イスラエルのハイファで調査をしていたときのことだ。滞在先の友人宅に偶然置いてあったアラビア語新聞を読んでいて、ある1つの記事に惹きつけられた。

文化面に載ったその記事は、イスラエルの民放「チャンネル2」が制作した、とある異色のドラマを紹介していた。ドラマの名前は、『アヴォダー・アラヴィット(Avodā 'Aravit)』。直訳すれば、「アラブ人の仕事」という意味のヘブライ語である。どれほどこのドラマが異色であるかは、主人公がユダヤ人ではなくアラブ人であること、アメリカ合衆国の人気コメディになぞらえて「中東版サインフェルド」と賞され、英語字幕つきDVDが発売されるほどに注目を浴びているということを描くだけでも、すでに充分であろう。

シオニズムを建国理念とし、1948年に建国されたイスラエルは、世界中からユダヤ人を移民させてできたユダヤ国家である。実際はその総人口のうち、約2割をアラブ人市民が占めているが、彼らがユダヤ人市民と公平に扱われているとはいえない。現に今このとき(2011年11月7日)、国会では基本法を改訂し、公用語からアラビア語をはずすか否かという議論がおこなわれており、国会議員の約3分の1がすでに賛成の意を示しているという。隣り合って暮らしてはいても、ユダヤ人市民のアラブ人市民に対する不信感は強い。「自爆で一般市民を殺すような、パレスチナ人“テロリスト”と同じ言語を喋り、同じ宗教を信じているアラブ人など信用できない。全員まとめてヨルダン川の向こうに行ってしまうがいい。そうでなければ、我々はいつまでも安眠できない」。ヘブライ語を学んでいたころ、教師やクラスメート、商店の店主、さらには行きずりの者までがこ

とあるごとにそういうのを、しばしば聞かされてきた。

いっぽうのアラブ人市民自身もまた、ユダヤ人中心主義のイスラエルに憤懣をおぼえ、占領地パレスチナに共感を抱き、そこにパレスチナ国家が樹立されることを熱望している。シオニズムを批判したアラブ人国会議員が、苛烈なバッシングの標的とされるのもめずらしくはない。ところが彼らは同時に、今さらパレスチナには帰属できないとも痛感しているのである。占領地のインフラは、イスラエルに比べるとあまりにも貧弱であるし、60年以上に渡る分断が、イスラエルと占領地の文化的相違を大きくしてしまった。「パレスチナ人と名乗りたいけれど、いろいろな理由があって難しい。けれども自分は“イスラエル市民”ではあるけれど、断じて“イスラエル人”ではない。イスラエル人とは、この国ではユダヤ人のみを意味するのだから」。彼らの複雑なアイデンティティを、彼ら自身の語りをまとめて表現すれば、このようになる。ユダヤ人もアラブ人も、この国でそれぞれに苦しんでいるのである。とりわけ、互いどう冷静に向き合うかということは、長らく互いを遠ざけてきた双方にとって、切実な課題である。



ハイファの名所、「預言者エリヤの洞窟」。ヘブライ語、英語、アラビア語の解説文が掲げられているがアラビア語の表記には誤りがみられる。

そんなイスラエルで、アラブ人が主人公のテレビドラマが制作され、ゴールデン・タイムに放映されたのだ。しかもその主題は、彼らイスラエルのアラブ人市民が常に直面しているアイデンティティ・クライシス、つまり「自分はパレスチナ人として生きたいのか、それともイスラエル市民として生きたほうが利口なのか」という、心身を引き裂かれるような苦悩である。『アヴォダー・アラヴィット』の非凡さは、そんな深刻かつ危険な話題を、自虐的なブラック・ユーモアのきいた、家族で観られるシットコムに仕立てたところだ。「自虐的」と書いたところでおわりのように、このドラマは作り手の多くもアラブ人なのである。脚本はアラブ人市民の若手注目株作家・ジャーナリストのサイド・カシューアが手掛け、主人公一家を演じる役者陣も、第一線で活躍するアラブ人俳優

で固めている。このようにアラブ色の濃いドラマが、イスラエル史上例を見ないものであるのはいうまでもない。

このように、刺激的な話題に事欠かない『アヴォダー・アラヴィット』であるが、なによりも強烈なのは、主人公の造形であろう。イスラエルの新聞社に勤める記者である彼は、まぎれもなく作者カシューアの分身である。カシューアの慧眼は、この自身の分身に、極端なユダヤかぶれというキャラクターを与えたことにあらわれている。「ユダヤ人エリート」、つまりイスラエルの支配層であるアシュケナジーム・ユダヤ人にならんがため——もちろん、そんなことは不可能なのだが——、彼はなりふり構わぬ行動に出て、周囲をハブニングに巻きこんでゆく。しかもアシュケナジーム・ユダヤ人の猿まねをし

つつも、「あいつらを見返してやる」と息巻くという、恐るべき自己矛盾を披露するのである。実はタイトルの『アヴォダー・アラヴィット』とは、「いい加減な仕事」「まがいもの」を意味するスラングであり、主人公のおこないそのものである。観る者は彼の愚かしさを笑いつつも、虚を突かれてどきりとするのだ。自分にもそんな一面がないかと。彼をそんな行為に駆り立てる部分が、自分にもあるのではないかと。『アヴォダー・アラヴィット』は、自身の直視したくない隠された姿を、アラブ人市民とユダヤ人市民双方に突きつけてくる。エピソードの見せ方はあざといが、イスラエルという国の歪んだ現実を、これほど鋭くえぐってみせた娯楽作品は、おそらくはじめてであろう。

2008年にはエルサレム国際映画祭のテレビドラマ部門で最優秀賞を受賞し、2010年秋には話数を大幅に増やし、第2シーズンが放映されたこのドラマの、国内の評価についてはいまだ不透明な点が多い。しかしながら、このような作品が制作され、注目を浴びること自体に、筆者はイスラエル社会の変化を感じた。すなわち、ユダヤ人市民とアラブ人市民、そして占領地のパレスチナ人が、互いに同じ人間として向き合う準備ができつつあるのではないかと、ということだ。そしてその変化に、研究者もついてゆくべきではないか。そう考えたのが、本研究会を立ち上げた契機である。

「パレスチナ人」の誕生とシオニズム

占領地のパレスチナ人はもちろんのこと、イスラエルのアラブ人もその誕生を望むパレスチナ国家。実はパレスチナという国は、有史以来存在したことがない。東地中海沿岸南西部が、そこにかつて住んでいたクレタ系の海洋民族の名を取って、漠然とパレスチナと呼ばれてきたにすぎない。おもな住民はアラブ人であったが、19世紀末、シオニズムを掲げるアシュケナジーム・ユダヤ人が入植をはじめ。その後、第一次世界大戦後の英国による委任統治時代を経て、彼らは前述のように、1948年にユダヤ国家イスラエルを建国することになるが、その結果100万以上ともいわれるアラブ人(パレスチナ人)が家や土地を失い、難民化することとなった。これをパレスチナ人たちは、「ナクバ(“大災厄”の意)」と呼ぶ。

一般的には、この1948年のナクバが、パレスチナ・イスラエル紛争の発端とされている。しかしながら、当時すでにユダヤ人の入植がはじまって半世紀が経過していた。紛争は突如降ってわいたのではなく、半世紀の間に入植者とアラブ人との接触があり、摩擦へと発展していったというのが真相だ。1920年代に入ると、アラブ人たちは入植に危機感を抱くようになり、周辺地域で起こっていたアラブ・ナショナリズムの影響を受けて、パレスチナ人アイデンティティを醸成し始める。つまり彼らは、ユダヤ人入植者の存在を認識することによって、パレスチナ人となったのだ。しかしそのいっぽうで、一部の地域では40年代まで、アラブ人と入植者が平和に共存していたという証言も残っている。また、さまざまな宗教・教派が雑多に入り混じるパレスチナでは、古来異なるバックグラウンドを持つ者たちが隣人と



イスラエル北部・ガリラヤ地方、クフル・ビルアムの教会。クフル・ビルアムは、キリスト教徒が多く住むアラブ人の農村だった。ナクバ時に村が破壊されたが、追放された村民たちの子孫は教会を再建し、ここでミサをおこなうことを誇りとしている。

して助けあい、宗教行事を共有するのは当然のことであった。シオニズムもパレスチナ・ナショナリズムも、当初は自分たちの国がほしいという、まっとうな希求から生まれたものである。しかしながら、アラブ人との接触や外部からの影響を経て、シオニズムは排他的な性格を帯びるようになり、その姿勢は今日の占領政策の根幹をなす。それに自爆という“殉教行為”で対抗しようとする一部のパレスチナ解放運動もまた、シオニズムの合わせ鏡のような存在といえよう。共同研究「パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」は、これまでほとんど研究されてこなかったこれら2つのナショナリズムの接点を、さまざまな視点から探ることをめざしている。9.11から10年を経て、さらに硬化しつつあるこの紛争のゆくえを見定めるためにも、必要な作業であろう。

【参考文献】

- Khalidi, Rashid. 1997. *Palestinian Identity: The Construction of Modern National Consciousness*, New York: Columbia University Press.
- 白杵陽 2000『宙づりにされた人々—イスラエルのアラブ』稲賀繁美編『異文化理解の倫理にむけて』pp. 41-58 名古屋大学出版会。
- 菅瀬晶子 2009『イスラエルのアラブ人キリスト教徒—その社会とアイデンティティ』溪水社。
- 藤田進 1989『蘇るパレスチナ—語りをはじめた難民たちの証言』東京大学出版会。
- イスラエル日刊紙 Haaretz の記事 "Israeli MKs waver on support for Jewish identity bill", 7. November. 2011. (<http://www.haaretz.com/print-edition/news/israeli-mks-waver-on-support-for-jewish-identity-bill-1.394088> アクセス日 2011年11月8日)



21世紀に入ってから、イスラエル政府が「テロ防止」のために建設した「分離壁」。占領地パレスチナに大幅に食い込んで建設されており、パレスチナ人の生活に深刻な影響をおよぼしている。

すがせ あきこ

国立民族学博物館助教。専門は文化人類学・中東地域研究。イスラエルのアラブ人キリスト教徒をおもな調査対象とし、現在はムスリムとキリスト教徒、ユダヤ教徒が共有する聖者崇敬について調査を進めている。著書に『イスラエルのアラブ人キリスト教徒』(溪水社)、『新月の夜も十字架は輝く—中東のキリスト教徒』(山川出版社)などがある。